

中原淳一がデザインした洋服を作る

— 『平凡』昭和二十九年（一九五四）十一月号「ファッションシヨウ」より —

橋口佳緒理

はじめに

既製服が今ほど多量に売られていなかった時代、服は家庭で作ることが主流であり、戦中・戦後の女性雑誌には和服、洋服の作り方、更正の仕方などが掲載されていた。

洋服は戦前から着用されていたが、男性と職業婦人のような一部の女性に限られていた。戦中には和服でもなく洋服でもない、活動しやすい活動衣（いわゆるモンペ）が推奨されるようになった。戦後になっても、衣料品不足と女性も外で働かなくてはならない環境から、モンペは着用され続けたが、昭和二十二年（一九四七）にクリスチャン・ディオールがロングスカートを発表すると、世界中で大流行し、日本では二十三年から二十四年にかけて流行した。活動しやすい形であることとスカートの流行から、女性は洋服に対する憧れを強くした。そのようななかで、夫の戦死や失業によって働かざるを得ない女性やこれから仕事、結婚をしようとする女性が洋服を身に付けたいと洋裁学校に通う者が増加した。

洋裁学校は戦前から存在していたが、戦後になるとその数は増えていっ

た（表1参照）。小泉和子は『洋裁の時代 日本人の衣服革命』において、洋裁学校が繁栄した背景には三つの要因があると述べている。

一つ目、

従来は和裁が女性の教養として重要で、結婚して家庭に入るには必要な技術であった。不幸の際には生計を支えることもできたのだが、洋服に代わった時、洋裁が和裁に代わって家庭裁縫の地位を獲得した。

二つ目、

平和な時代の女性にとって洋裁技術習得はもともと身近な夢となり、その望みを実現する最短コースが洋裁学校だった。

	洋裁学校(校)	生徒数(人)
昭和22年(1947)	400	45,000
24年	2,000	200,000
26年	2,400	360,000
30年	2,700	500,000

表1 洋裁学校の数と生徒数

(林邦夫『戦後ファッション盛衰史』による)

差し迫った現実として、既製の無い時代、誰かが家族の洋服を縫わねばならず、縫える人がいなければ人に頼まねばならなかった。頼まれるにしても洋裁技術をどこかで習わなければならなかった。

当時の洋裁学校で代表格といえば、ドレスメーカー女学院と文化服装学院である。両校はそれぞれ『ドレスメーカーキング』、『装苑』という雑誌を発行し、洋服を女性たちに提示した。

新しいファッションを紹介する雑誌は次々と創刊され、その中に中原淳一の『それいゆ』『ジュニアそれいゆ』『ひまわり』があった。これらの雑誌において中原は自身がデザインして製作した洋服を紹介し、作り方についても説明をしていた。

中原デザインの洋服を見て、着てみたいと思う気持ちは洋裁の心得の有無とは関係ない。私の洋裁技術は高校の家庭科レベルだが、学校で学んだ知識程度で、中原デザインの洋服を作って着てみようとしたらどう出来るのか。

中原淳一の一ファン、雑誌の一読者が雑誌に掲載されている洋服とその型紙を見て、実際に作ってみる、というコンセプトで製作を試みた。

そのため、材料は見本の通りではなく、作り手がこれで作りたいと思うものを使用し、専門用語や縫い方などがわからない場合、デザイン画を参考にしてその形に近づくよう筆者なりの解釈で作っていくこととした。

1 製作する洋服を選ぶ

今回選んだ洋服は、『平凡』昭和二十九年（一九五四）十一月号（以下同誌1とする）の「ファッションショウ」に掲載されていたジャンパースカートとした（図1）。この服を選んだ理由は三つある。

①「洋裁の心得がなくてもできる」と紹介していること。

家庭で服を作ることが珍しくなかった頃とはいえ、皆が皆、洋裁の心得があったわけではない。中原は世の少女や大人の女性たちが積極的におしゃれを楽しむことを説き、専門的な技術を持つていなくても中原のデザインした洋服を作り、おしゃれを身近に感じることが出来るものとして、今回製作してみる題材にふさわしいものと考えたからである。

②型紙が掲載されていること。

中原のデザインした服を作るにあたって型紙を探してみると、ファッションデザインのイラストの割に、意外と型紙まで掲載されたものが少ない。今でこそソーイング関係の書籍には、実寸大の型紙が付録についているのは当たり前で、その感覚で探してみたが、実寸大はおろか、型紙が掲載されている雑誌も、イラストの数と比べると少ない。

「可愛い、着てみたい」と思う洋服があっても型紙がないことが多い。デザイン画から型紙を製図する技術を持たない人にとっては、単に憧れで終わってしまう。筆者の気に入ったデザインで、その型紙が掲載されていたのが、同誌1に紹介されたジャンパースカートだった。

③中原がジャンパースカートを幅広い季節に着られる洋服として読者に勧めたり、特集したりしていること。

ジャンパースカートはワンピースやスーツより、布地がずっと少くてすむし、新鮮で気楽な感じが、若い人にぴったりします。それに下に着るものの変化によって、(半袖のブラウスからセーターに至るまで) 季節を巾広く着られるもので、通勤から通学には是非一枚ほしいものです。

同誌1

夏の間は気軽にワンピースを作れたのだけれど秋も深まる今日この頃は何となく心細く、ウールのワンピースを作るのはちょっと荷が重くて頭をかしげてしまいます。それで今年はスカートやジャンパースカートでうんと楽しく可愛らしくそして美しくなる服を考えてみましょう。

『ジュニアそれいゆ』(以下同誌2とする) 昭和三二年九月号

また、同誌2(昭和二十九年秋号)の「それいゆじゆにあばたーん」では十一種の秋服デザイン画が掲載されているが、そのうち八種がジャンパースカートで、「ファッションショウ」と似たデザインの服(図2)を重ねて紹介していることから、この頃の中原はこのようなデザインが特に気に入っていたものと考えられる。



図1 「平凡ファッションショウ」
『平凡』昭和29年11月号



©JUNICHI NAKAHARA /ひまわりや

図2 「それいぢじゅにあばたーん」
『ジュニアそれいぢ』昭和29年秋号

2 型紙を製図する

先にも述べたが、現在のソーイング関係の書籍のほとんどが実寸大の型紙を付録としている。洋服ならS・M・Lサイズのラインがあり、自分のサイズに合った型紙を写し、使用するようになっていく。しかし、昭和二十年代前半の女性雑誌に実寸大型紙が付いているのは稀で、見つけられたものとしては『婦人生活』が二十四年から、一部のデザインに実寸大型紙を付録に付けていた。その後、他誌でも付くようになってきたが、実寸大型紙のないデザインには誌面に型紙の形と寸法が掲載されていて、自身で製図しなければならない。

洋服の型紙を製図するには、まず原型が必要となり、それを応用して製作する服の形にしていくなか、この原型が洋裁学校やデザイナーによって異なる。代表的なものとしては文化式（文化服装学院）とドレメ式（ドレスメーカー女学院・杉野芳子）で、雑誌において度々紹介されている。どの原型を使って製作するかは、その服が誰によってデザインされたかによるだろう。当然、デザインと原型は同一人物の手によるものとするのが無難だと思われる。

「ひまわり社の原型製図」（図4）が同誌2（昭和二十九年秋号）に掲載されていたので、これを下にして、ジャンパースカートの上衣部分の型紙（図3）を製図した。誌面のは実寸大ではないので、形を見ながら、記載してある寸法と自分の体格寸法を組み合わせて製図を試みた。（写真1）

スカート部分は掲載されている型紙だと丈が七二〜七四センチとある。この通りに身長が低い（一五〇センチ）筆者が着ると裾が足首までの長さとなる。スカート丈に関しては、自作の強みを活かして、自分好みの

長さに変えることとした。

ちなみに、型紙は裏紙を利用した。型紙は形さえ取ることができればいいので、型のラインがわかるのであればどのような紙を使用しても支障はない。

当館の所蔵する資料の中にも家庭で使用されたさまざまな型紙があるが、自身で製図したと思われる型紙は新聞紙や何かの裏紙を使用している。家庭で洋服を作る時には身近な紙を利用していただけられるため、敢えて型紙用の紙や白紙のコピー用紙は使用しないこととした。



図3 ジャンパースカートの作り方
同誌1

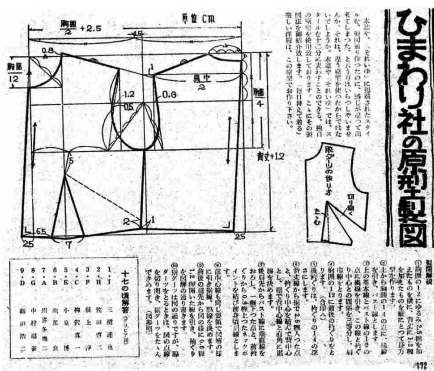
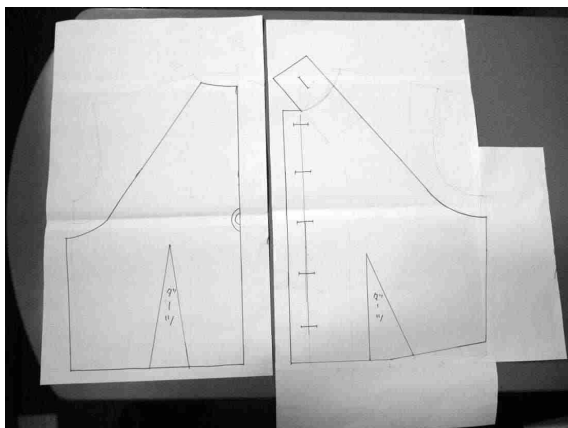
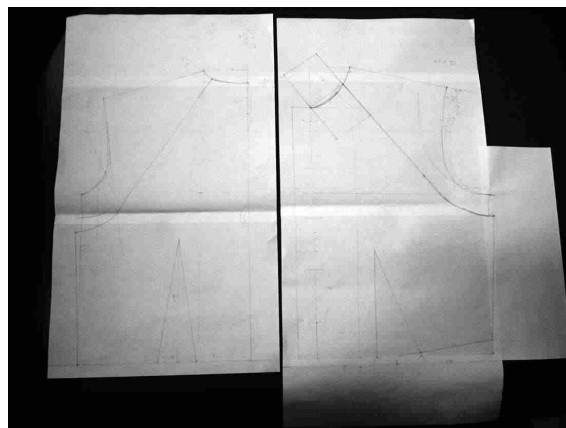


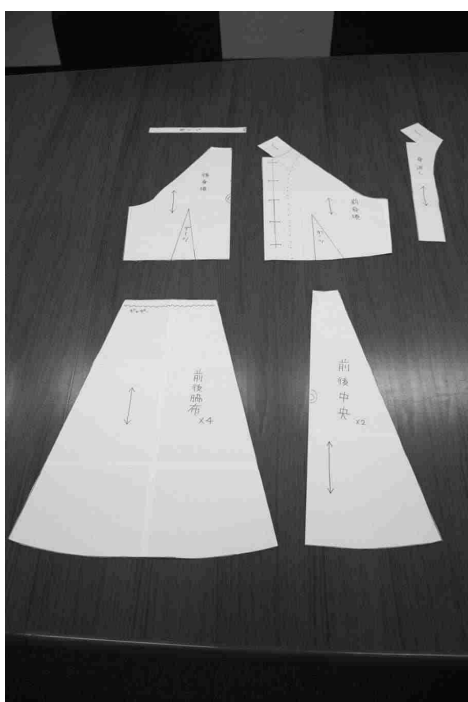
図4 「ひまわり社の原型製図」
同誌2（昭和29年秋号）



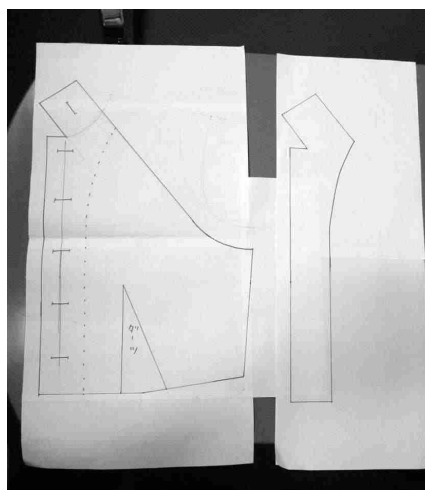
型紙の清書



型紙の下書き



製図した型紙を切り取る



上衣見返し型紙 (右)

写真1 型紙の製図

3 使用する生地とボタン

見本で使用されている生地はツイードだが、コール天で作っても面白とあるので、コーデュロイ（コール天）を使用した。

柄には「格子や縞でも変わった感じが出ます。」とあり、コール天の格子柄を探したが、筆者が気に入る柄がなかったこと、格子柄は柄を合わせて縫うことが手間になるので小花柄を選んだ。

選び方のポイントには、ジャンパースカートを秋から春まで着ることを考えると、生地そのものが暖かみのあるものなので、色は明るめに、暖かくなる季節にもおかしくない柄であること、ジャンパースカートの下に着るセーターやブラウスは黒やブラウン、白といった様々な色に合うこととした。（写真2）

ボタンは、JR総武線の下総中山駅にある手芸用品店『美園屋』で購入した。この店は明治四一年（一九〇八）からある手芸店で、販売されているものは、店主曰く全て昭和時代のものだという。端布、糸などの手芸道具が小さい店内に所狭しと並んでおり、特にボタンの種類と数が多い。

柄物の生地なので、ボタンそのものはシンプルなものの方が合うと思いい、また、生地の色が素朴なので原色や色の濃いものは浮いてしまうために避けた。

見本では全て同じボタンを使用しているが、筆者は一種類のボタン・色に絞れず、三種類のボタンを使用することにした。（写真3）

中原が紹介するデザイン画では、同じ服の中に数種類のボタンを使用するものは見られないので、そういうデザインは好きではなかったのかもしれない。



写真2 材料

（左から布地、芯地、ミシン糸、鉤ホック、ファスナー）

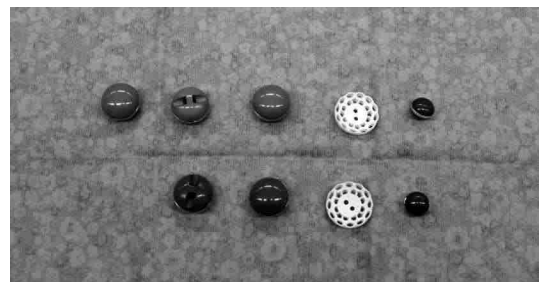


写真3 ボタン

二、縫製

1 洋服を作る

布に型紙をあてて、型を取る。この時、ダーツやボタンの印も忘れずに付ける。（写真4 ※写真4〜22は83ページ以降に一括掲載）

型を取ったら、型のラインから1〜2センチ外側を縫い代として残し、裁断する。（写真5）

「縫い方」では二番目の作業として「前身頃見返し線より一センチ内側まで芯をはり、」とあるが、裁断した布地に裁断前の芯地を貼り、布地と同じ形に裁つ。（写真6）裁ったあとはジグザグミシンで端の始末をする。（写真7）

基本的には「縫い方」に書かれている通りに縫っていくが、図面での説明がないので、わからないところはその形に近づくよう筆者なりの解釈で縫っていくこととした。

先ず前後のウエストのダーツを縫って、中心に罫を入れて割ります。

↓そのまま（写真8）

前身頃見返し線より一センチ内側まで芯をはり、上前に五個と見返しの衿の部分記入の位置とに、ボタンホールを作ります。

↓芯を貼る作業は裁断の時に済ませた。（写真2）ボタンホールについては、その印を作ることなのかホールそのものを作ってしまうことなのかはわからなかったが、「縫い方」の最後にも「ボタンホールを作り、」とあるので、ここは印を付けるといふことだと解釈した。

見返しと身頃を中表に合せて三方を縫い返します。

↓「三方」は身頃の裾部分も含まれるのだろうか。その場合、裾を縫ってしまうとスカートと接ぎ合わせることができなくなってしまうので、衿から前開き部分を縫うだけにする。

見返しを返す時、そのまま返してしまうと角がごわごわしてしまうので、糸を切らないように縫代を切り落とし、切り込みを入れておく。

（写真9）

見返しの奥の縫代は、二つ折りにして、端ミシンをします。

↓縫い代の始末は見返しだけの状態です方が楽なので、身頃と縫

い合わせる前に縫った。

左脇明きウエストより上十五センチを残して脇縫をし、縫代を割ります。

↓左脇の長さがちょうど十五センチだったので、左脇は縫わないこととする。（写真10）

袖割は出来上がり一センチ幅のバイアス布で始末します。

↓余っている生地からバイアステープを作る。（写真11）バイアステープで挟み始末することだと思うが、筆者が持っているテープメーカーは一・八センチ幅のものなので、半分に折ると一センチ未満になってしまい縫いにくい。そこで、片側だけを引つ掛けた形で縫うこととする。（写真12）

後ネックの中心に衿ループの中心を合せて縫い付けますが、両端は一センチの幅に縫い返します。

↓衿ループは中表にして縫い返したものをネックに付けるのかと考えていたが、その手順は書かれていないので、ネックに縫い付けてから返す要領で縫うのだと解釈した。ネック部分と衿ループを中表で縫い、返してループ全体を縫う。（写真13）

スカートは各各の縫い目を接ぎ合せて割りますが、左脇明き十八センチ縫い残します。脇布にギャザーをとり、八十センチにちぢめます。

↓筆者はここで左脇部分を間違えて全部縫ってしまった（写真14）ので、あとからファスナー部分の糸をほどくこととなった。縫い残すの

は十八センチとあるが、身頃脇の長さ+左脇明きフラスナーの長さとなるようにするので、実際には二十センチほどいた。(写真15)。

脇布をギャザーで八十センチに、とのことだが、身頃の裾の長さとお合わせなくてはいけないので、実際には七十六センチに縮める。(写真16)

身頃とスカートを合せてウエストを接ぎ合せ、縫代を身頃の方に片返します。

↓そのまま(写真17)

脇明きにフラスナーを付けます。

↓スカートやワンピースに使うのはコンシールフラスナーの方が良いが、値段が少し高いのと縫いづらいため普通のフラスナーにした。付けるのは脇なのでそんなに目立たないと思いい、出来るだけフラスナー部分を布で隠すようにして付ける。(写真18)

裾の始末は縫代の先を細かくいせこみ、たるみ分を消して共色薄地のバイアステープを付け、三つ折りにしてまつります。

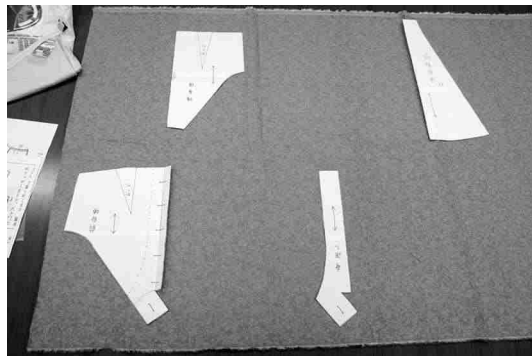
↓バイアステープを付けて三つ折りにしてまつる方法がわからないので、見返しの奥の縫代同様に二つ折りで端ミシンをかけた。(写真19)

上前裏のボタンホールを作り、仕上げして、下前にもボタンを付け、最後にループの両端に鉤ホックを付けます。

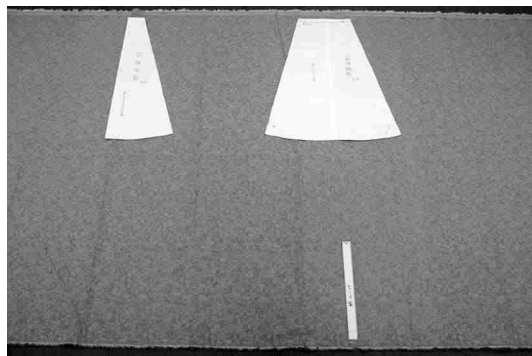
↓ボタンホールを作り(写真20)、ボタンを付ける。(写真21) ループの長さが少し足りなかったので付け足した。ボタンの位置が少し高め

だったのとループが太かったようで、見本通りの位置に付けられない。そこで、一番上のボタンの下にクロスさせる形で鉤ホックを使い留めることとする。

衿のボタンは二つ重ねて厚みがあるため、ボタンホールを作らずに、スナップボタンで留めることとする。(写真22)

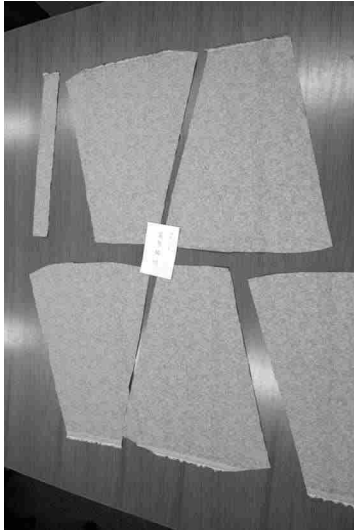


前身頃・後身頃・見返し

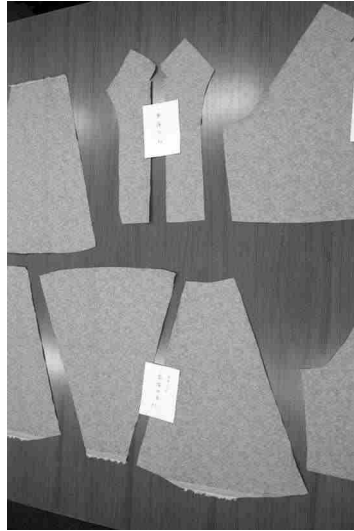


スカート・衿ループ

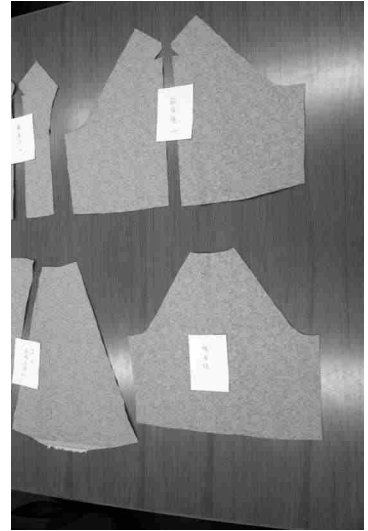
写真4 型を取る



脇スカート・衿ループ



見返し・中央スカート



前身頃・後身頃

写真5 裁断

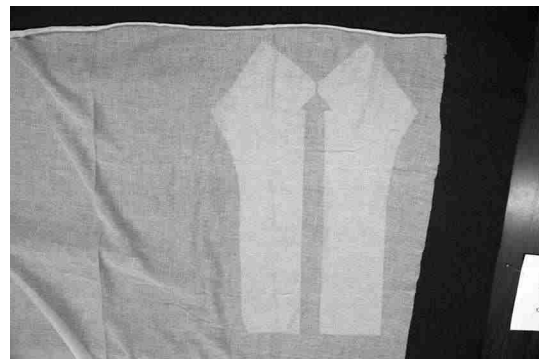
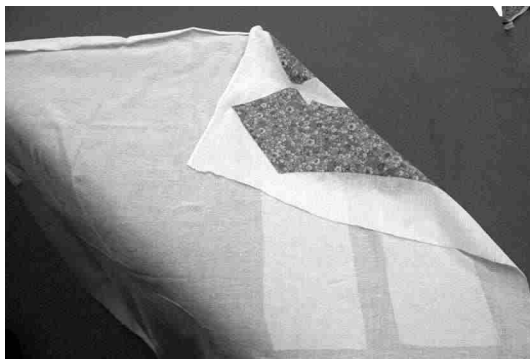


写真6 見返しに芯地を貼る

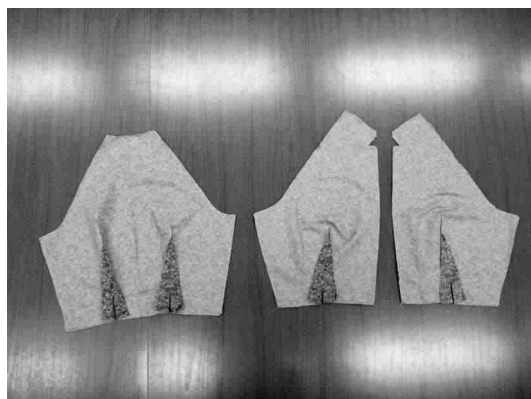


写真7 端の始末

中原淳一がデザインした洋服を作る



ダーツを縫う



ダーツに袷を入れて、割る

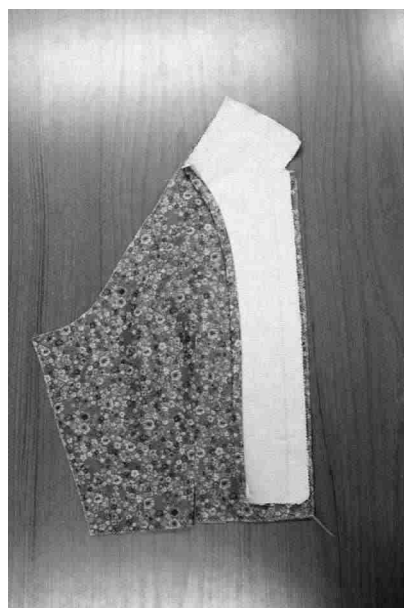
写真8 身頃にダーツを縫い、割る



角を切り落とす



返す



身頃と見返しを縫う

写真9 前身頃と見返しを縫い、返す



写真10 右脇を縫う

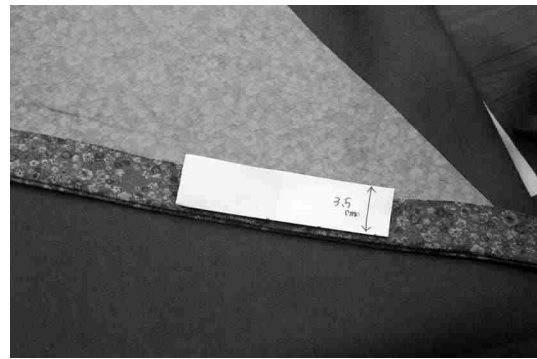
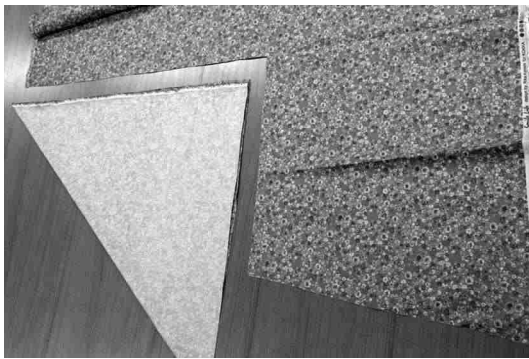
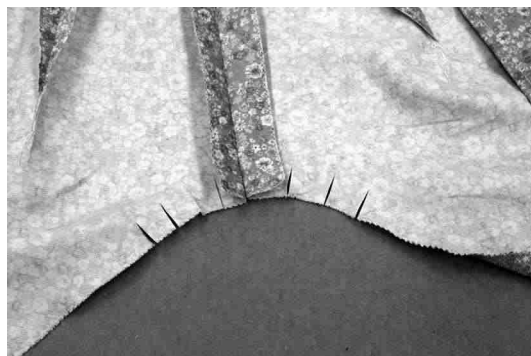


写真11 バイアステープを作る

中原淳一がデザインした洋服を作る



縫い代を内側に折ってアイロンをあてる



カーブには切り込みを入れる

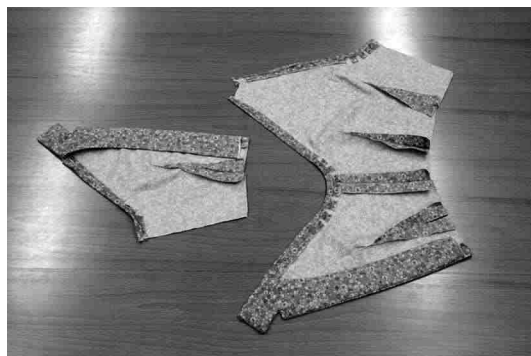


写真12 袖割をバイアステープで始末する



写真13 衿ループを後身頃に付ける



写真14 スカートを接ぎ合わせる



写真15 スカートのファスナー部分をほどく



写真16 脇布のギャザーを寄せる



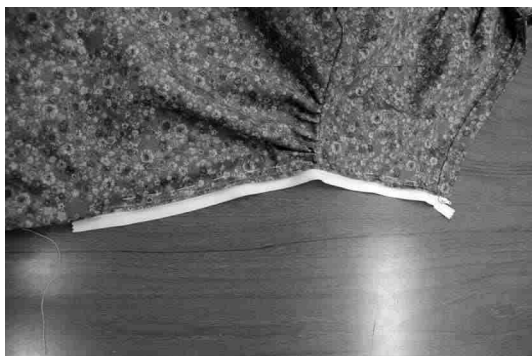
前



後

写真17 スカートと身頃を接ぎ合わせて、縫い代を身頃の方に片返す

中原淳一がデザインした洋服を作る



表に戻して縫う



ファスナーと服を中表に縫う



写真18 脇空きにファスナーを付ける



二つ折にして縫う



裾をいせこむ

写真19 裾の始末



写真20 ボタンホールを作る



前身頃

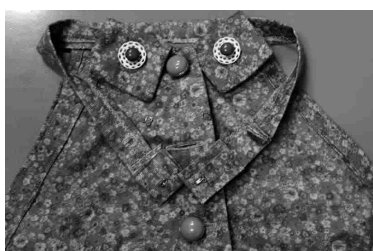


衿

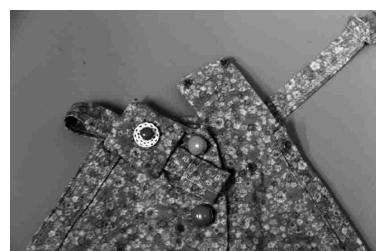
写真21 ボタンを付ける



ループの付け足し



鉤ホックを付ける



スナップボタンを付ける

写真22 衿周辺の作業

2 付属品を作る

生地が余ったので、髪飾りとしてのリボンとバッグを作る。

《リボン》

中原の描く少女にはリボンの髪飾りが付いていることが多い。実際『少女の友』にて髪飾りとしてのリボンに言及している。

リボンを使って下さい。これは僕が大好きな趣味で、絵にも始終描いています。カチューシャなんかでなく、ちよつと結んで飾ればほんとに少女らしい可憐な感じができます

「女学生服装帖」『少女の友』昭和十二年八月号

リボンは少女にふさわしい飾りです。それも昔のような豪華な大きさなものでなく、ごく小さな細い可愛らしい形を使うのが近頃の傾向です。そして今までのようなきまづいた場所だけにつけないで、自分の頭の毛の形によつて、種々考えて、小さなリボンや髪の毛のいろいろなところに付けてみるのも面白いでしょう

「秋の服装帖」『少女の友』昭和十二年十一月号付録

また、昭和十五年（一九四〇）二月号の『少女の友』「女学生服装帖」では「リボンの色々」というテーマで、様々な髪形に合わせたリボンの付け方を紹介している。

リボンは、一本の紐を作り、それを結ぶ方が作り方としては手間がないが、見栄えを気にするならばやはりリボンの形を作った方がいいと考え、

リボンの飾りを作る。

作り方（写真23〜27参照）

- ・ パーツ（リボンの上、リボンの下、結び目）を用意して、縫い目があるべく表に出ないように縫う。
- ・ リボンの上下、それぞれを表に山が二つできるように折り、合わせてしつける。
- ・ 結び目でリボンの中央を括り、リボンの後ろでまつる。

作り始める前は、髪飾り用のリボンとして作るつもりでいた。そのためゴムを付けようかと思っていたが、出来上がったものを見て、ジャンパースカートやジャンパーの下に着るブラウスの袖などに付けてもかわいいかもれないと思ひ、髪に留めるためにスリーピン（パッチン留め）を、服に留めるために安全ピンを付けた。



写真24 パーツを縫う

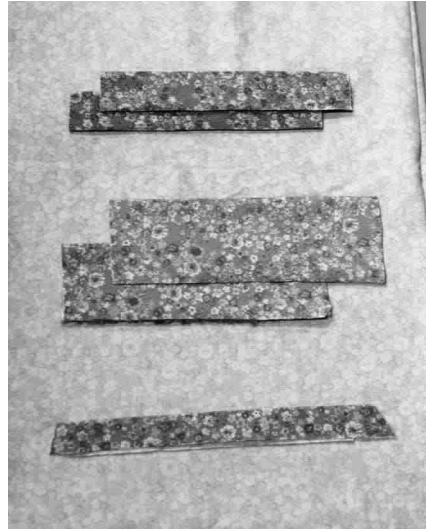


写真23 パーツを裁断



写真26 結び目を付ける



写真25 パーツをしつける



写真27 後ろにスリーピンと安全ピンを付けて完成

《買い物用バッグ》

『新女苑』（実業之日本社）昭和十四年八月号より（図5）

洋服と同じ生地で作るバッグ。寸法だけが書いてあり、作り方の記述はないので、見本と同じ形になるように作る。

見本と変える箇所

- ・表にポケットを付ける。
- ・紐は図6のように付ける。

作り方

- ・芯地を貼って裁断する。（写真28）
- ・端の始末は一つ折りにしてジグザグミシンをかける。（写真29）
- ・側面同士を中表で縫い合わせる。（写真30）
- ・ポケットを縫う。（写真31）
- ・開き口の端を二つ折りにして縫う。（写真32）
- ・側面と底面を縫い合わせる。（写真33）
- ・紐を縫い付ける。（写真34）

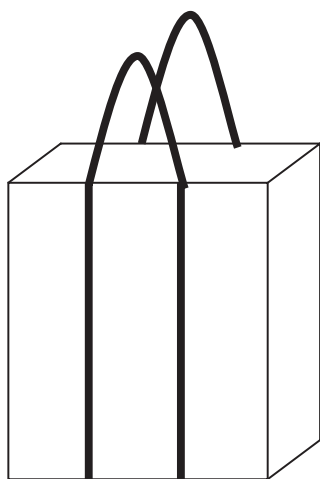


図6

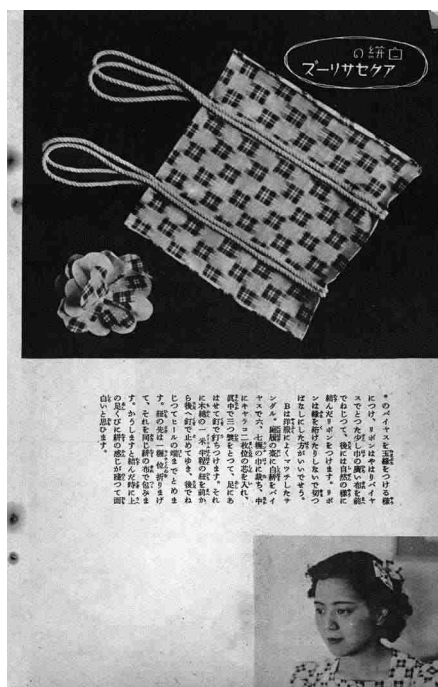
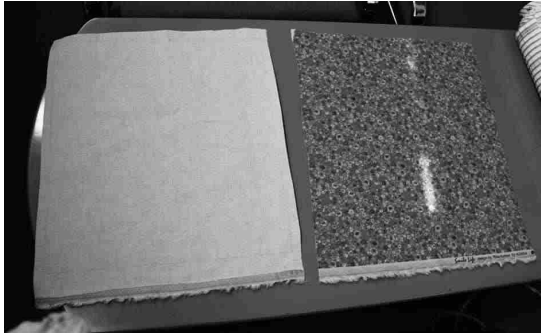
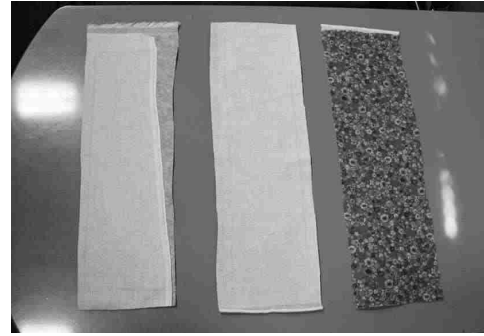


図5 「紺とゆかた」

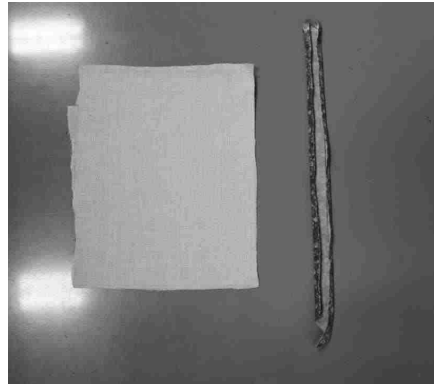
『新女苑』（実業之日本社）
昭和14年8月号



バッグの前後

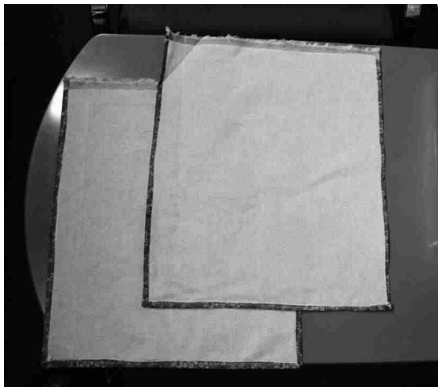


側面と底面

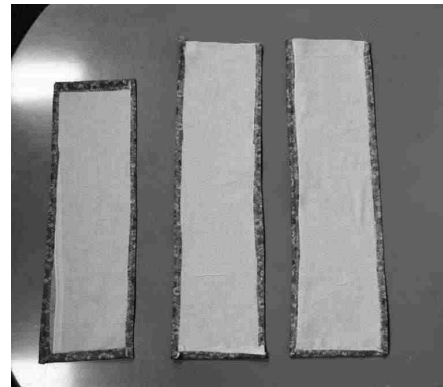


ポケット

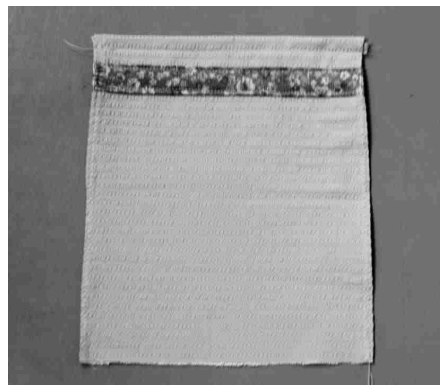
写真28 芯地を貼って裁断



バッグの前後



側面と底面



ポケット

写真29 端の始末

中原淳一がデザインした洋服を作る



写真31 ポケットを付ける

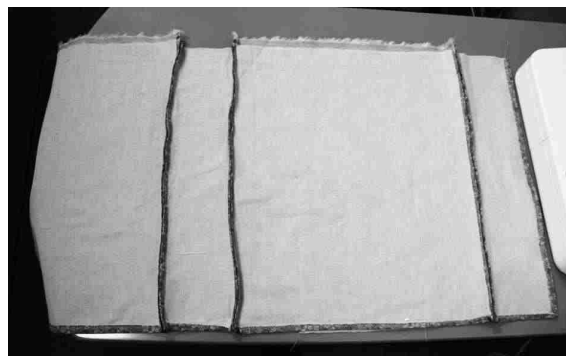


写真30 側面を縫い合わせる

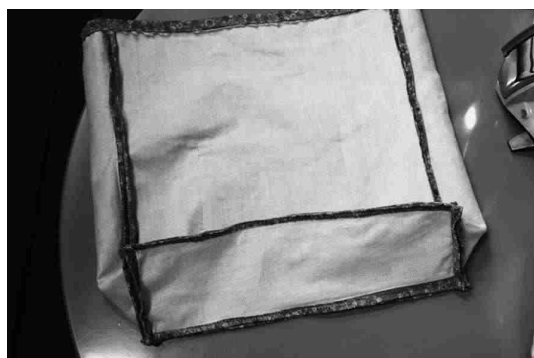


写真33 底面を縫う

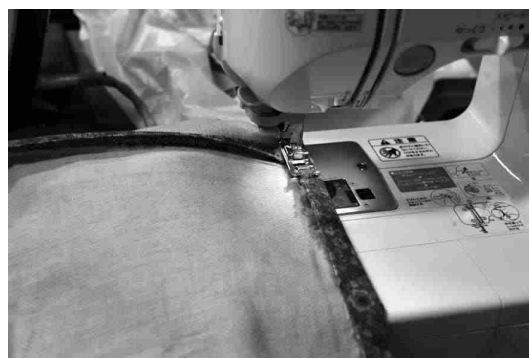


写真32 バッグの開き口の端を縫う



写真34 紐を付けて完成

おわりに

このジャンパースカートは一気に作ったわけではないので、正確な作業時間はわからない。布の裁断から完成までは大体二〜三日を費やし完成を見た。この時間が早いのか遅いのかは判断できないが、雑誌で見て「欲しい」と思った服が三日で手に入ると考えると早いのではないか。実際には材料を集め、型紙を作る時間が必要となるのでもう少し時間が必要となる。

縫製作業は洋裁の心得がなくてもそれなりに出来るが、やはりその土台となる型紙の作成は難しいと感じた。原型を製図し、それからアレンジするため、慣れていないと体格にぴったり合う型紙を作成することは難しい。それでも、少し大きめに作っておけば、縫製後に詰めることはできる。型紙が体格通りの寸法で作れないからと言って手作りを諦める必要はない。必ずしも見本通り、デザイン画通りに出来るとは限らないが、そこは個性を出すと考えれば洋服製作は難しいことではない。

今回は全て新しい材料を購入して製作したが、中原はお金をかけるファッションを肯定していたわけではない。むしろ、今あるものをどう活かすか、という考えがあつて生活そのものを楽しくする工夫をしていこうという姿勢でいた。次回、中原デザインの洋服を作る機会があれば、古着や余り布を活かして作ってみたい。

著者プロフィール

橋口佳緒理（はしぐち・かおり）

昭和五十八年 大阪府生まれ

駒澤大学文学部歴史学科卒業

平成二十年から昭和館学芸部勤務